

クリスタ・ヴォルフ『カッサンドラ』における痛みの表象

西尾 悠子

千葉大学大学院国際学術研究院

The representation of pain in Christa Wolf's novel *Kassandra*

NISHIO Yuko

要旨

クリスタ・ヴォルフ『カッサンドラ』（1983）における痛みの表象は、これまで、主人公カッサンドラが客体から主体に移行する過程で経験する「主体化への痛み」（Schmerz der Subjektwerdung）を中心に論じられてきた。本稿は「ジェンダー」「記憶」「語り」の観点から『カッサンドラ』の語りを通して現れる痛みの表象に焦点をあてる。痛みは誰もが経験している感覚でありながら、常に主観的であるため客観的に捉えることが難しく、痛みを感じている本人の反応からその度合いを推測することしかできない。言い替えれば、主観的であるからこそ、痛みに対する反応からその人物の固有の特性を知ることが可能であると考えられる。本稿では戦争にかかわる男性と戦争から切り離された女性、とりわけカッサンドラが、それぞれどのようにして痛みと向き合っているか、さらに痛みがカッサンドラの語りと記憶の中でどのように作用しているかに着目し、考察を行った。

キーワード

痛み、ジェンダー、記憶、語り、東ドイツ文学

1. はじめに

1982年のフランクフルト詩学講義において客員講師となった東ドイツ作家クリスタ・ヴォルフ（1929-2011）は、トロイア戦争の伝承をトロイア王女カッサンドラの視点から語り直した小説『カッサンドラ』*Kassandra*（1983）をめぐって、次のように述べている。

わたしがもう——一体いつからだろう？——カッサンドラを悲劇の登場人物として見ることができないことは判明している。彼女は自分自身をそのようには見ていなかったはずだ。彼女の同時代の人々との関係は、彼女が痛みに対処する方法と同じなのだろうか？であれば、その痛み——ある特別な種類の痛み——は、わたしがカッサンドラを受け入れて変える箇所、主体化への痛み（Schmerz der Subjektwerdung）なのだろうか？¹

アイスキュロスの悲劇三部作『オレスティア』のひとつ『アガメムノン』に登場するカッサンドラは、ミケーネ王アガメムノンを待ち受ける運命を嘆く。自分を戦利品として連行した男を悼むその姿に疑問を覚えたヴォルフは、カッサンドラを男性中心主義に基づいて展開されるギリシア神話から「(考えられる) 社会的、歴史的な座標に戻す」(FPV142) ために調査を重ね、彼女自身を語り手に据えた『カッサンドラ』を発表するに至った。トロイアの父権制社会の中で抑圧され、従属的な立場に立たされるヴォルフのカッサンドラは、主体性を獲得するためにもがき続ける。「痛み」(Schmerz) は、そのプロセスにおいて重要な役割を果たす。

痛みは、身体の損傷によって引き起こされる事象に限られない。それは情動 (Affekt) であり、痛みの感覚や感情 (Schmerzgefühl) であり、たとえば身体的な感覚によって呼び起こされたり、恐怖や抑うつや快楽というかたちを取る (あるいはこれらから生じる) こともある²。ヴォルフが自問する「主体化への痛み」(Schmerz der Subjektwerdung) は、客体 (Objekt) からの脱却を図り、主体 (Subjekt) へ移行する際に伴う苦痛を指すことばだ。『カッサンドラ』における痛みの表象については、これまで「自律性を求める闘い」(Ringens um Autonomie, FPV 151) を展開するカッサンドラの「主体化への痛み」を中心に論じられてきたが³、カッサンドラは自分が主体になる過程で生じた痛み以外にも、過去の苦痛を伴う体験や、アガメムノンの妻クリュタイムネストラに惨殺される未来への恐怖、他者の痛みに対する反応に基づくさまざまな痛みについて言及している。痛みへの言及は、ヴォルフの言葉を借りれば「痛みに対処する方法」(mit Schmerz umgehen [lernen]) でもある⁴。この「痛みに対処する方法」が作中に登場する男性と女性で大きく異なっている点は、『カッサンドラ』を読むにあたって注目すべきポイントである。『カッサンドラ』で言及される痛みが、カッサンドラによる現在の視点からの語り・語り直しであることを踏まえれば、痛みと語り、痛みと記憶の双方の視点から読み解く必要も出てくる。本稿は

『カッサンドラ』の語りを通して現れる痛みの表象に着目し、「ジェンダー」「記憶」「語り」の観点から考察を行う⁵。

2. 痛みと性差

死を目前にしたカッサンドラは、回想を通じて、痛みの感覚や付随する記憶について繰り返し触れている。身体的な要因から生じる痛みもあれば、彼女を待ち受けている死への恐怖のように、精神的・心理的な要因から生じる痛みもある。痛みは、誰しものが経験したことのある感覚ではあるが、常に主観的であり、客観的に評価をすることは非常に困難である。主観的な感覚を第三者に対して客観的かつ正確に伝えて共有することもまた難しい。言い換えれば、ある特定の痛みをどのように感じ、その痛みに対してどのような反応を示すかについては個人差があると考えられる。カッサンドラは、痛みは直接的に痛みを感じている人間、または間接的に痛みと対峙している人間の人となりや推し量る材料にもなり得ると考え、次のように述べている。

もっとずっと後になってから、人間の痛みに対する振る舞いが、わたしの知るほかのどんな徴候よりも多くその人間の未来について露呈していることを理解した。⁶ (KA260)

本章では、戦争にかかわる男性と戦争から切り離された女性、そしてカッサンドラが、それぞれどのような方法で痛みと向き合っているかについて論じる。

「痛みに対する傲慢さ」の行く末

原始母権制社会から父権制社会へと移行し、男性が支配する性／女性が支配される性という社会構造が形成されたトロイアや古代ギリシアにおいて、痛みや恐怖を認めることは弱さの象徴に他ならなかった。痛みも恐怖も、まるで存在していないかのように扱われてはいるが、実際はそうではない。戦地へ赴くトロイアの戦士たちは、戦争への恐怖をひた隠しにしようとしているだけで、あの手この手で恐怖を否定し、抑圧し、痛みや戦いから逃れようとする。対するギリシア人の恐怖は、異国で戦わなければならないがゆえにトロイア人のそれを遥かに凌駕しているような印象すら与えるが、それでも決して攻撃の手を緩めることはなく、幾年にもわたって凄惨な戦いが続いた。痛みや恐怖の感情を否定し、取るに足らないもののように扱うことで、男たちは戦争の継続を可能にしたのである。痛みを些末なものとして捉える姿勢を、カッサンドラは「痛みに対する傲慢さ」(KA260)と形容する。

他方で、直接戦場に駆り出されることはないものの、男性に従属するものとして戦争に巻き込まれる女性たちは、殺戮と死のあいだにある第三の道である「生きること」(KA363)を見出す。貴賤の隔てなくイデ山の洞穴に身を寄せ合うようになっていたトロイアとギリ

シアの女性たちは、トロイアの終焉を肌で感じ取りながらも、限られた時間を精一杯生きることには心を傾ける。この穏やかな暮らしの輪に、痛みの感情を黙殺する男たちが加わることはない⁷。殺戮か死か、いずれかの道しか選べない男たちの「痛みに対する傲慢さ」は、痛みや恐怖を否認し、「生きること」をも放棄する。男と女、父権と母権、主と従の二項対立を体現している父王プリアモスと母ヘカベーは、「痛みに対処する方法」の観点から見ても対極に位置している。野心と虚栄心に突き動かされ、戦いから身を引くことができないプリアモスが、息子たちを失った心痛のあまり生きる気力をなくしたのとは対照的に、同じように身を引き裂かれるような思いをしたヘカベーは、より思いやり深く、より生き生きと変化していく。それぞれの「痛みに対する振る舞い」は、確かにその人間の未来を、如実に物語っているのである。

「痛みに対する傲慢さ」を語るうえで、特異な立ち位置にいるのがアマゾネスの女王ペンテシレイアだ。何物にも従わない自由で勇猛な女戦士である彼女は進んで戦場に立ち、戦争の元凶と見なす敵＝男を滅ぼすために死をも厭わない姿勢を示しており、生への執着を持たない。それゆえに、イダ山の共同体に加わることも、第三の選択肢としての「生きること」も拒む。男性を標的としている以外は、まるで戦場の男たちの映し鏡のようなペンテシレイアは、殺戮のほかに活路を見出せず、英雄アキレウスと一騎打ちの末に敗れる。捕虜の身となるよりも殺されることを選び、恐怖の片鱗も見せなかったその姿勢も、「痛みに対する傲慢さ」として捉えることができるだろう。同性愛者であり、女性を愛することができないアキレウスが、自身が討ったペンテシレイアの（もはや「生身」の女性ではない）亡骸に情欲を抱く様からも、彼女がアキレウスと同種の間人、すなわち男性と同等の間人として位置づけられていることが読み取れる。

主体化への痛み／主体としての痛み

では、カッサンドラ自身はどうか。自身の「支配者たちに同調する傾向」(KA298)を否定できないカッサンドラは、「王の娘は恐怖心を抱かない、なぜなら恐怖は弱さであり、弱さに効くのは血のにじむような鍛錬だ。気が狂った女だけが恐怖を抱く。恐怖のあまり気が狂っているのだ」(KA265)という支配者側が一方的に押しつけるルールに則り、長らく恐怖心を抑え込む努力を重ねてきた。かつての自分は痛みには耐えられることで有名だったと振り返り⁸、男たちの「痛みに対する傲慢さ」とも共通するその振る舞いは、女である自分が知り得ない隠匿された事実の到達のため、男性と同等でありたいとする彼女の飽くなき欲望の表れでもある⁹。アポロン神に仕える女神官としての地位を確立し、トロイアに蔓延る欺瞞に気づいていながらも、王家の一員として父王プリアモスに同調せざるを得ない立場に葛藤するカッサンドラは、抑圧された「真実への衝動」¹⁰に駆られた瞬間に激しい発作に見舞われ、「耐え難い痛み」(KA295)から身を守るために自ら狂気に身を委ねる。「自らの声で話すこと」(KA228)、正しいと思うことを臆することなく口に行うこと、それは従属を強いられたカッサンドラ最大の望みだが、愛する父と対立せざ

る得ないがゆえに「頭蓋骨を痛みで割られるような」(KA233) 苦痛を伴う行為でもある。床に臥せている間、カッサンドラの沈んだ意識は「痛みを感じない」「宙に浮いた状態に留まって」おり (KA270)、目覚めた途端に苦痛を覚えるようになる。唯一痛みに対処する方法は、痛みを与える原因、すなわち真実から目を背けることだった。ギリシアに奪われた王姉ヘシオネ奪還のために編成された第一の船、第二の船に続き、第三の船に隠された欺瞞を見抜いた瞬間に再度正気を手放したカッサンドラは、父王の前妻アリスベに「浮上しなさい、カッサンドラ。あなたの内なる目を開きなさい」(KA297) と諭されてはじめて、己のうちにある痛みと正面から向き合う。嫉妬や欺瞞、冷遇、見誤りを発端とする負の感情と対峙し、自分のうちにある痛み＝主観的な感覚を認めることによってカッサンドラは「主体としてのわたし」(ich) を取り戻す¹¹。戦争を機に揺らぎはじめた「痛みへの傲慢さ」は消失し、以後、カッサンドラは狂気の状態に陥ることも、男でありたいという願望を口にすることもなくなる¹²。

カッサンドラが痛みを正面から捉えるきっかけとなるのは、愛する父との決別である。アキレウスをおびき寄せるための囮として、妹ポリュクセナを利用する企てへの協力を拒んだ結果、カッサンドラは光も届かない英雄墓に幽閉される。父がこのような仕打ちをするはずがないと苦悩する中で、カッサンドラは「これまで『父』と呼んでいたものの喪失にかかわる痛み」(KA375)こそが痛みであると思に至る。それは、今まで自分が縋っていた父との別れであり、父からの解放でもあった。故郷の滅亡と恋人アイネイアスとの別離を経た今、カッサンドラは「わたしの死の瞬間、今ほど生き生きとしていたことはない」(KA248) と告白する。痛みを受け入れ、認めることは、生きることへとつながる。傷を受けても前に進むことができる。「わたしは明日にでもまた起き上がるだろう、元気になった——痛みが達した心臓ともに」¹³ (KA369) という表現からは、カッサンドラの痛みが、主体化への痛みであると同時に、生成した主体が受動的に関知している痛みでもあることがうかがえる。

3. 語る痛み／語られる痛み

前述のとおり、『カッサンドラ』で言及される痛みは、トロイアの滅亡後、刻一刻と迫る死を待つカッサンドラが現在の視点から語る痛みである。「この物語とともにわたしは死へと赴く」(KA227) という宣言ではじまるカッサンドラの語りは、男性の支配下から逃れ、自分自身のことばで語る術を模索するカッサンドラの痛みの記憶そのものであり、痛みを起点として紡がれる。本章では、「痛みと記憶」「痛みと語り」のふたつの側面から考察を進める。

ボーガーツは、痛みと記憶の関係性を以下の三つのパターンに分類している¹⁴。

1. 痛みが想起を引き起こす：痛みがきっかけとなり、記憶と結びつく場合を指す。

痛みは直接的に想起される内容ではなく、想起から痛みが連想されるに過ぎない。ニーチェの言葉を借りれば、「なにかを烙きつけるのは、それを記憶に残すためである。消えることのないいたみのみが、記憶に残る」¹⁵。

2. 想起が痛みを形成する：「想起の瞬間＝現在」と「想起された瞬間＝過去」の時間的・空間的な隔たりが痛みを引き起こす場合を指す。想起時における想起の対象の不在が、痛みの直接的な要因となる。
3. 痛みが想起される：痛みが直接的に想起される場合を指す。一度は過ぎ去った痛みも、想起を通じて再度痛みの記憶を呼び起こす。

いずれの場合も、記憶と痛みは密接に結びついている。

カッサンドラの語りの契機となるのもまた、痛みである。作中のさまざまな出来事を通じて感じた心理的な痛みもあれば、「知覚されていない、生きてもいない感情」「実現されていない憧憬」に対する「幻肢痛」(FPV116)として生じる痛みもある。注目すべきは、語りの始点となる痛みが自己の生存の、ひいては記憶の現存の確認をも兼ねている点である。

わたしは痛みを試してみる。医者が、壊死しているかどうか確かめるために手足のひとつを刺すように、わたしの記憶を刺してみる。わたしたちが死ぬよりも早く、痛みは消え失せるのかもしれない。(KA230)

上述のように、痛みを知覚し、受け入れることは生きることと直結している。では、痛みを感じなくなったとき、人はまだ生きているのだろうか。「わたしは痛みを試して、いくつもの別れに思いを馳せる。どの別れもそれぞれに異なっていた」(KA230)、このように述べて、自分がまだ生きているかどうかを確かめるために、生きていると実感するために、カッサンドラは痛みの記憶から少しずつ過去を手繰り寄せていく。自らが「恐怖の記憶」(Angst-Gedächtnis)「感情の記憶」(Gefühls-Gedächtnis)と称する記憶が最後にたどり着くのは、恋人アイネイアスとの別れの場面である。

『カッサンドラ』において、痛みや恐怖の感情を否定する男性は自己も他者も破滅へと導く存在として描かれているが、その中でも例外として位置づけられているのが、アイネイアスとその父アンキセスの親子である。処女喪失の儀式において誰にも選ばれず、ひとり神殿に取り残されていたカッサンドラを迎えに行ったアイネイアスだったが、互いに期待された役割を果たせず儀式は失敗に終わる。自分をモノとして扱わず、それゆえに強制された儀式の遂行もできなかったアイネイアスは、カッサンドラにとってトロイアの男たちとは一線を画す存在だった。カッサンドラにトロイアの歴史を教える役目を負ったアンキセスは、権力に迎合することなくトロイアで行われている政治や戦争の実態を説いた。柔軟な思考を持つアンキセスは王宮の外でも一目置かれており、戦争が激化すると女性たちとともにイダ山の共同体で暮らすようになる。

アイネイアスもアンキセスも、戦と無縁というわけではない。アンキセスは老齢ゆえにすでに第一線から退いているものの、かつてはヘシオネ奪還に向けて第二の船に乗船し、アイネイアスに至っては、トロイアを不在にしている間は戦場に身を置いている。見送りの群衆と足並みをそろえ、第二の船に乗り込んだ最愛の父に向かって「王の姉を、然らずば死を！」(KA266)と叫ばざるを得なかったアイネイアスは、カッサンドラ同様に王家への忠誠に葛藤を抱いていた。常に志を共にしていたカッサンドラとアイネイアスだが、男である以上、アイネイアスは戦いから逃れることができない。それは、果てのない繰り返し(Wiederholung)に身を委ねることを意味していた。「勝つことをやめることができれば、あなた方のこの街は持ちこたえるでしょう」(KA360)というカッサンドラがギリシアの民に与えた予言は、積み重ねた勝利の先には破滅しかないことを示唆している。沈みゆくトロイアからの脱出を図り、ともに新しいトロイアを建国しようと訴えるアイネイアスが、いずれ英雄として担ぎ上げられる「繰り返しの未来」をカッサンドラは予見した¹⁶。そのうえで、カッサンドラは英雄を愛することはできない、愛する人が変貌していく様を見たくはないとして、その手を拒む。愛する人のために、互いのために選択した別れは、「痛みを試す」ことによって想起される痛みの記憶のひとつなのである。

この痛みは、わたしたちにわたしたちのことを思い出させてくれる。この痛みはいつか、もしそのいつかがあるとすれば、わたしたちが再会するときのしるしとなるでしょう。(KA385)

この直後、「光が消えた。消えていく。／彼らがやってくる」ということばとともに回想は途切れる。死へと赴くカッサンドラが最後に言及した痛みは、なにを意味しているのだろうか。はじめてクリュタイムネストラと対峙した際、夫アガメムノンを殺すという彼女の強い意志を感じ取ったカッサンドラは、夫の戦利品である自分も無事では済まされないと早々に悟っている。アイネイアスと再会できるかもしれない「いつか」が永遠に來ないことも、十分に理解できていたはずだ。にもかかわらず、なぜ彼女は、彼らの別離の痛み未来への可能性を託すのだろうか。カッサンドラは、「わたしたちが死ぬよりも早く、痛みは消え失せるのかもしれない」と述べている。では、痛みを感じなくなったとき、人はまだ生きているのだろうか。命が消えるその瞬間、痛みは、記憶は、一体どこへ行くのだろうか。

現実味がないとわかっていながらも、カッサンドラはクリュタイムネストラに嘆願する様子を思い浮かべる。

クリュタイムネストラ、わたしを、あなたの暗い地下牢の中に永遠に監禁して。生きるぎりぎりのものを与えて。でも、あなたにどうしてもお願いしたいことがある。書記をひとり、使いに出してほしい。あるいは、鋭い記憶力と力強い声を持つ若い女奴

隷であれば、もっといい。その女奴隷がわたしから聞いたことを、さらに自分の娘に言い伝えることを許すと命令してほしい。その娘がまた自分の娘に伝えて、そうしてまた伝えていって。英雄たちの詩の流れと並行して、このか細い一筋の小川が、やっとの思いで、遠い未来をいつか生きることになるであろう、もしかしたら今よりも幸福である人々のもとにもたどり着けるように。(KA319)

カッサンドラ自身も、己の嘆願が実現可能なものであるとは捉えてはいない。カッサンドラが想像で描いた要求は、男性の詩人たちが取り上げないであろう女性たちの声を、痛みを、後世に伝えるための試みであり、その試みは『カッサンドラ』という作品の中で機能しているといえる。主体になるための痛みと、主体としての痛みが、自らを語り、語り継がれていく。アイネイアスと再会する「いつか」の際に互いを見分けるしるしとなる痛みについても、同様に解釈することが可能だ。痛みの記憶は「いつか」、今よりも幸福な世界に届くかもしれない。カッサンドラの痛みは、不確かな「いつか」としての未来に向けた一縷の望みでもあるのだ。

注

- 1 Christa Wolf: Frankfurter Poetik-Vorlesungen, in: *Kassandra. Voraussetzungen einer Erzählung*, München 2000, S. 114. [以下、同作品からの引用は文中にて頭文字FPVと引用ページ数で表記] 日本語訳は（言及がない限り）筆者によるものとする。
- 2 Iris Hermann: *Schmerzarten. Prolegomena einer Ästhetik des Schmerzes in Literatur, Musik und Psychoanalyse*, Heidelberg 2006, S. 10.
- 3 代表的な論文として、Ortrud Gutjahr: „Erinnerte Zukunft“. Gedächtnisrekonstruktion und Subjektkonstruktion im Werk Christa Wolfs, in: Wolfram Mauser (Hg.): *Erinnerte Zukunft. 11 Studien zum Werk Christa Wolfs*, Würzburg 1985, Irmgard Roebing: „Hier spricht keiner meine Sprache, der nicht mit mir stirbt.“ Zum Ort der Sprachreflexion in Christa Wolfs *Kassandra*, in: Mauser (1985), Gerhard Neumann: Christa Wolf: *Kassandra*. Die Archäologie der weiblichen Stimme, in: Mauser (1985), Sigrid Weigel: „Blut im Schuh“ – Körper-Gedächtnis und Körper-Sprache in Christa Wolfs Prosa, in: Sigrid Weigel: *Bilder des kulturellen Gedächtnisses. Beiträge zur Gegenwartsliteratur*, Dülmen-Hiddingsel 1994, Irmgard Nickel-Bacon: *Schmerz der Subjektwerdung. Ambivalenzen und Widersprüche in Christa Wolfs utopischer Novelistik*, Tübingen 2001などが挙げられる。
- 4 Sandy Scheffler: *Operation Literatur. Zur Interdependenz von literarischen Diskurs und Schmerzdiskurs im „Prager Kreis“ im Kontext der Moderne*, Heidelberg 2016, S. 10.
- 5 文学における痛みの表象については、Hermann (2006) および Scheffler (2016) を参照。本稿で扱うジェンダーから見た痛みの表象の考察は、Hermann (2006) が2.3章 „Schmerz – Gender – Erinnerung“ で取り上げているインゲボルク・パッハマンの『マーリナ』論から着想を得た。
- 6 Christa Wolf: *Kassandra. Erzählung*, in: Christa Wolf: *Kassandra. Voraussetzungen einer Erzählung*, München 2000, S. 260. [以下、同作品からの引用は文中にて頭文字KAと引用ページ数で表記]

- 7 戦争で身体的または精神的に傷を負った男たちは例外であり、イダ山の共同体で生活をするうちに生への喜びを取り戻している。(KA378)
- 8 その一方で、カッサンドラははじめてギリシア人神官パントオスと一夜をともにした際、彼の目に「どれほどまでに身体的な痛みを恐れているかのように」(KA255) 映ったことも自覚している。片や痛みを恐れ、片や痛みを恐れぬ矛盾した振る舞いについては、Neumann(1985) も指摘している。[S. 241]
- 9 (男性が従事する) ト占官に比べれば、女神官である自分を取るに足らない存在であると考えカッサンドラは、ト占官である双子の——すなわち自分と瓜二つの——きょうだいヘレノスに対し「わたしが彼だったなら。わたしの性別を彼のものと取り換えることができたなら。わたしの性別を否定し、秘密にすることができたなら」(KA258) と嫉妬心を露わにする。出自も年齢も顔も同じきょうだいと自分を隔てる要因を性差に見出しているからこそ、男になりたいという欲望が顕在化されると考えられる。
- 10 Irmgard Roebing: „Hier spricht keiner meine Sprache, der nicht mit mir stirbt.“ Zum Ort der Sprachreflexion in Christa Wolfs *Kassandra*, in: Mauser (1985), S. 219.
- 11 「痛みはあるの？ ええ、痛みはある」(KA297)
- 12 トロイア戦争勃発後、妹が男ではない(戦場へ赴けない)ことを残念に思う兄ヘクトルに対して、カッサンドラは「もう決して男でありたいとは思わなかった」(KA354) と振り返っている。
- 13 ベンテシレイアの壮絶な死を目の当たりにし、生きる気力を失ったかのように見えたカッサンドラが、アリスベとの対話を通じて痛みを覚えた際にかみしめた一言。
- 14 Roland Borgards: Schmerz/Erinnerung. Andeutung eines Forschungsfeldes. In: Roland Borgard (Hg.): *Schmerz und Erinnerung*, München 2005, S. 11-15.
- 15 「痛みが想起を引き起こす」という原理を、ニーチェは「地上におけるもっとも古い(そして残念ながらもっとも長い)心理学の基本原理」であるとも述べている。Friedrich Nietzsche: *Zur Genealogie der Moral. Eine Streitschrift. Zweite Abhandlung: „Schuld“, „schlechtes Gewissen“ und Verwandtes*, in: Friedrich Nietzsche: *Jenseits von Gut und Böse/Zur Genealogie der Moral. Kritische Studienausgabe*. Hg. von Giorgio Colli und Mazzino Montinari. Bd. 5 (KSA 5). München/Berlin/New York 1988, S. 291-337, hier S. 295.
- 16 『カッサンドラ』とは人物設定が異なるが、ヴェルギリウスの叙事詩『アエネーイス』は、アンキセスとともにトロイアを脱出したアイネイアス(アエネアス)が遍歴の末にローマ建国の祖となる様を描いている。